

「天満神社本殿」

県指定有形文化財に指定！

2月18日、天満神社本殿が県指定有形文化財（建造物）に指定されました。これまでも市指定文化財として親しまれてきましたが、改めて、文化財的価値が高く評価され、県指定となりました。

天満神社本殿の魅力「すごさ」について、4つの視点から紹介します。

- 文化財としての「すごさ」
- 歴史を伝える「すごさ」
- 建築物としての「すごさ」
- 守り伝えてきた「すごさ」



懸魚の裏には鬼がひそむ

文化財としての「すごさ」

県下の指定文化財のうち、神社の本殿建築物に限って見ると、松山市の伊佐爾波神社などの国指定が3件、県指定が1件であり、天満神社本殿はこうした物件に次ぐ指定となりました。

天満神社本殿のように、唐様（禅宗様）を主体にしながら和様が入り混じる建築様式は江戸時代の愛媛県下の流行を示しています。特に瀬戸内（東予地方）沿岸の神社は、彫物を多用するなど、見た目にも豪華な建築物が多いことが特徴ですが、その中でも天満神社本殿は特に意匠を凝らした神社建築であり、建築当時の部材の残存状況も良いことから、「江戸時代の東予を代表する貴重な建築であり、江戸時代の優れた建築意匠を示す重要な建造物」として高く評価されました。

歴史を伝える「すごさ」

天満神社の開基については、明確な根拠を有するものではありませんが、社伝では古来「官山」「王地山」と称した現地（現在の大地山公園）に八幡宮が祀られていたところ、文明9年（1477



三手先の詰組が密に配された美しい構造。長い年月、軒をしっかりと支えてきた

建築物としての「すごさ」

比較など）によって、元禄建築であることとの裏付けとともに、川之江村の宮崎家による大工仕事であることが指摘されており、より地域の歴史を体現した文化財であることが分かってきました。

天満神社本殿は桁行三間、梁間二間で、入母屋造平入の銅板屋根をかけており、正面には軒に小さな唐破風を付けた三間の向拝をつけています。軒も繁垂木となっている他、屋根を支える組物は三手先の詰組を用いることで格式が高められており、唐様の絵様肘木の使い方も巧みです。木鼻に付けられた阿形咩形の龍をはじめとして、猿・象・唐獅子・犀・仙人など一見して華やかな彫物だ



唐様の美しい彫刻が施された向拝軒下

けでなく、下側に錫杖彫りが施された海老虹梁や、籠彫りの技法が用いられた菊の持送、懸魚（破風下の飾り板）の裏側に見える鬼の結綿など、一見するだけでは見逃してしまいそうな箇所にも職人の技とこだわりを垣間見ることが出来ます。また、全体がバランス良く一体の建造物を構成しており、見るべきポイントの塊の様な本殿建築とも言えるでしょう。

守り伝えてきた「すごさ」

いかにして、現在の天満神社本殿は建立されたのでしょうか。当時天満村は上と下に分かれていましたが、天満神社のある下天満村を治めたのが大庄屋寺尾

問 文化・スポーツ振興課 28・6043



※駐車場はありません

建築年代について、社伝では元禄8年（1695年）焼失、元禄11年（1698年）新殿建立とされています。周辺に延宝9年（1681年）の石燈籠も残されており、以前より信仰の場所だったことがうかがえます。建築当初の棟札や資料が残されておらず、確認された棟札は安永4年（1775年）の「御正殿修繕」以降のもですが、建築学的な視点から元禄建築が有力視されてきました。最近では市内研究者の調査（近隣社寺建築に関わる古文書や棟札の確認、現存する大島八幡神社（新居浜市）との



躍動感ある唐獅子と内部まで立体的に彫られた菊